



## ご挨拶

---

水澤絳雪ひとり雑誌

雪下

第二十七号

2022/08/24 発行

題字：高橋弘美

近々、ブログの大改装を予定している。開設からおよそ二年にわたって、皆さんにはたいへんお世話になったけれども、当時最先端(?)の技術でこしらえたあのブログも現在では技術的に多少古めかしさを感じざるを得ないし、自分の要望とブログの技術や機能とがどうも食い違っているという違和感を無視できなくなってきた。

会員制のブログを立ち上げるという考えを抱いたころは、あのブログの仕様にそれなりに満足していたし、ひと仕事したという達成感を感じたものだが、二年も経てば考えも変わるし技術も古くなる。これを読んでいる方は会員登録してクレジットカード情報なんか入力していただいている方だが、クレジットカード情報は永遠ではないのに、現在の状況ではこれを更新するすべがない。月額会員の登録解除も自分ではできない。これはちょっと不便である。最近、これらを技術的に解決できる方法を見つけたが、それを実装するついでに、そもそもわがブログとは結局なんなのかということのを再考して再構築してみようと思えるに至った。今月はそうしたことを書いてみたい。

## 今号の内容

今後のブログ運用の予定  
後記に代えて

### 今後のブログ運用の予定

なにもこんな個人的な試行錯誤に皆さんを巻きこまないでもいいようなものだが、考えはじめてしまったので仕方がない。いまわたしが考えていることと、これからの方向性のようなものについて書いてみることにする。

ブログの仕様については、たぶん一年くらい前にはすでに違和感というか、これでいいのかというような感じを抱いていたと思う。あのブログを開設したのは二〇二十年六月だが、そのころのわたしがなにを考えていたのかももう忘れてしまったし、その当時のなにやら切羽詰まって思いつめたような気持ちはすでにどこかへ行ってしまった。

そもそも、なぜあのブログを立ち上げたのかというところ、とうとう自分も経済的に自立しなければならぬかという危機感を感じたためである。経済的自立ということはすなわち収入を得ることなわけで、収入を得るには職に就くしかないが、あいにくこの世の中にわたしが就けるような職は見当たらなかつ

た。というより、本音の部分ではわたしは職に就きたくないし、いかなる形においても自分を社会的な枠の中に落としこみたくないという、変な意地のようなものがあつた。しかしもちろんその一方で、わたしはあくまで社会的に確立され自立したひとり人間であることに、言葉にできないほどのあこがれを感じていたのでもあつたけれども。

ともかく、わたしは現金収入ということを目に考え、苦肉の策としてあのブログを作ったのである。とはいえわたしは常に、自己開示の欲望とその真逆の欲望とのあいだをうろろしている人間だ。その度合いによってわたしが自分の作品を人に読ませたい度合いも変化する。二〇二十年当時のわたしは、わたしの作品というものをあまり人目に触れさせたくなかつた。

と、ここまで書いて気がついたが、わたしにはどうも、わたしの書くようなものを求めているという読者だけに自分の作品を見てもらえたいし、作品というのはそもそもそういうものであるという、不動の確信があるようだ。わたしは自分の魂がこの世界においてとらえたものを書くが、作品を通じてそれがあなたの魂に触れればそれでよいので、それは作品の文学的価値とか、批評とかいうこの世における問題とはまた微妙に次元の異なる問題に違いない。読むことはいつでも魂の問題である。というより、ほとんど読むことだけが魂の真に切実な問題である

という人が、いつの時代にもいるに違いない。ある種の人があるが、人生においてもっとも苦しいときに言葉を、それも書かれた言葉を求めるのかわたしは知らないけれども、そこに書かれていることがこの日常を超えた、というよりこの日常を通じて見えてくる永遠の世界であるとしたら、人はやはりときに切実にそれを求めるものであると、少なくとも人生の中でそれを求める瞬間があるのだといわねばならない。

現代社会の問題であるとか、日々変化する現実に対処するための技術であるとか、そうしたことを示してくれる書物は確かに有用で必要だろうけれども、わたしはもっと別のことを考えている。また別の次元の人間のあり方のことを考えている。

言葉には二種類ある。この物質的な現実を描写するための言葉と、それを超えた、というよりその背後にあるものを表明するための言葉と。これは言葉の表裏である。そして人間の表と裏でもある。人間は表の顔だけでできているわけではないので、きつと表の顔だけでは生きていけないのに違いない。ときどきは、裏の顔にも目を向けなければならない。逆もまたしかりであるけれども、人がみずからの裏の顔を見つめたくなかったときに、この表向きばかり重視される社会の中で真実に裏の顔をあらわにしていく人間を探したくなかったときに、そのときに違いない。いわゆる宗教や芸術というものが生きてくるに違

ない。人はパンのみで生きるのでない、神の口から出るひとつひとつの言葉によって生きる、とイエスは云っている。神の言葉はどこにあるか？ 神を感じる人のもとに。神を信じる人ではない、神を感じる人のもとに、神の言葉はあるに違いない。そしてわたしは神を感じる。わたしははずれわたしの言葉が必要な人に届くことを疑わない。どうやってそうなるかは少しも知らないけれども、わたしはなぜかそうなることを疑っていない。

とはいえ、出会いとか発見とかいうのは難しい問題である。こういうことは摂理に属することで、人間に属することではないし、この場合、わたしが選ばれるのであってわたしが選ぶのではない。たとえばわたしがなにがなし神を感じていて、神がわたしにわたしの知らない言葉を与えてくれるのだとしても、見つけてもらわなければ選ばれることもできない。これは厳然たる事実である。

そうすると、手っ取り早い手段としてありとあらゆるところに広告を出すとか、宣伝活動にいそしむとか、文学賞をとるとか（これは決して手っ取り早い手段ではないが）、そういう方向へつい目が行きがちになる。

でも人が誰かを、あるいはなにかを発見したり知ったりするということは、奥深い秘密の領域で進行するプロセスであって、わたしはその領域に自分の

がさつで粗暴な手をつっこむことを畏れる。摂理は美しいが、人は貪欲で野蛮なのだ。広告など、この貪欲さ野蛮さがうるわしい摂理を覆い隠し飲みこんでしまうもつとも戦慄すべき例である。

このような考えから、わたしは宣伝や広告というものを忌み嫌っているし、自分をことさらに喧伝して回るようなこともしたくない。わたしのブログはアフリエイトだとか広告だとかいうものとは無縁だし、SNSとは相性が悪い。あれは人が人につきあうための道具だったはずだ。それがいつの間にも、単なる自己顕示や宣伝合戦に墮してしまったのだろう。もつとも、人間のやることだから、なにが顕示や宣伝に当たるのかという線引きも非常に難しいものではあるのだが。

これはわたしの魂の確信であり、それゆえに自分に云い聞かせてもいることなのだが、人はもつと大きな摂理を信頼していなければならぬ。人は放っておくと、あまりにも自分の欲や知力に頼りすぎる。というより振りまわされすぎる。おのが知力を高めるのではなくて、摂理の上に安心して乗っかっていること、ただそれだけでいいはずなのだが、まわりとその乗り方を教えてくれる自然が乏しく、そういうことを知っている人もひとりもないとしたら、それは非常に寂しいことである。

せんだって、わたしは空海と目が合った。空海じ

いさん（というような呼び方はどうもこの巨人に対して失礼なような気がするのだが、どうしてもこう呼びたくなってしまうような笑い顔を彼はわたしに浮かべたので、こう呼ぶことにする）のことはほとんど知らなかったし、まったくノーマークだったといっているが、しかし目が合ってしまったのだから仕方がない。わたしは空海の本を読みはじめた。そして彼がこのようにこぼしている箇所を読んで、まったく頭を金槌でもってぶん殴られたような気がしたものである。

昔の人は道を学ぶと自分の利益を度外視した。今の人は書物を読んでも、自分の名声と金儲けにしか心を動かさない。（松永有慶『空海』より）

これは空海が嵯峨帝の重臣のひとりにあてた手紙に書いたことだそうであるが、千二百年も前からこうだったのだから、現代の人間がどうかなど考えるまでもない。とはいえ、やはりこんなことではないわけである。なにもかもが金や名声で成り立っているのではないし、金や名声で成り立たない領域に住んでいることを自覚している者が、このようなざまであってはいけないわけである。昔イエスという人が、わたしに向かっておれがおまえに飯を食わしてやると云ったが（図らずもこの言葉は父が母にプロポーズするときに使った言葉だそうである。こ

の件に関して母は、約束不履行も甚だしいといっている）、てめえの頭を絞ってどうにか現金収入を得て生活しようなどと考えている段階で、わたしは結局彼の言葉に忠実でなく、その言葉を信じていなかったわけだ。つまり、自分に働く摂理がどのような種類のものであるかを、わたしは少しも知らなかったし、信用していなかったわけである。

だいぶ話がずれたが、このようなわたしのいまの考えや立ち位置にしたがって、現在のブログを眺めてみよう。その前に、わがブログの愚かな歩みをざっとふり返ってみることにする。

まず、わがブログは会員制のブログとしてスタートした。月額定額を支払った会員の方だけが、記事や小説を読めるようにするつもりだった。が、その試みは、ちょっといつだったかおぼえていないが、ともかく早々に行きづまって、わたしはブログの記事をほとんど開放してしまった。ここで、最初の会員制の構想は崩れたことになり、みなさんがせっかく設定してくださったログインIDだけのパスワードだのほとんど無駄になってしまったことになる。この時点で会員制などやめてしまえばよかったのだが、いま皆さんがお読みになっているこの雑誌というやつが残っていた。わたしはこのひとり雑誌という試みに愛着をもっていたので、これをせめて名ばかりの会員制の代わりにしようと思ひ、今号まで

ただこの雑誌の発行のみでもって名ばかりの会員制度を続けてきた。システムを再構築するとか、そういうことは非常に労力がかかって面倒なことなので、仕組みとやっていることがなんだかかみ合っていないではないかと思ひながらも、いままでも放置していたわけである。

だがどのみちこの会員制というやつが意味を失っている以上、いつかは廃止しなければならなかったのである。だいたい、エンクロージャーに羊を囲いこむごとく人を囲いこんでどうするのだ。羊というのは、のそのそ歩きまわって草を食んだり空を見上げたり瞑想にふけったりするから生きている甲斐があるので、柵の中に囲いこまれて育ったのでは、とてもあの感動的なベツレヘムの物語は生まれそうにない。ベツレヘムの物語が生まれるには、放っておくとどこまでも草を求めて出て行ってしまう羊と、それをのんびり追いかけてゆく、物憂い顔をした孤独な羊飼いとが、どうしても必要である。

イエスはわたしはよい羊飼いでであると云った。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる、と。草原を、荒れ野を、無邪気に喜びに満ちて動きまわる羊こそ、羊飼いに命を捨てさせる羊に違いない。

わたしが自分から命を捨てる。

わたしは自由に命を捨て、

また、再び自由に命を得る力を有している。

(ヨハネ十・十八)

このようなわけで、ブログの会員制度はやめるつもりでいる。登録いただいている皆さんの登録情報なんかはこちらで消去するつもりである(どっちみちなみなさんにはこれをやる手段がない)。こんなことは、決めたらできるだけ早くやってしまったほうがいい。それで今月はこんなに早く皆さんに雑誌を出しているというわけなのだ。

八月いっぱい、いままでの会員制はいったん終わりにする。ご利用頂いた皆さま、いままでほんとうにどうもありがとう。二十七ヶ月ものあいだ、ほんとうにお世話になりました。

それで、このあとはどうするのかというと、この月刊雑誌という制度だけは今後も続けていきたい気持ちがある。これは半ば手紙のようなもので、意思表示のある方に自分から送るといふこのやり方が、なんだか一種の親密圏をかたちづくっているように好きなのだ。人に読んでもらいたいからといって、この雑誌までばんとそこらへんに公開してしまつたら、それはそれで味気なく、わたしのなかでも適切なバランスを失いそうな気がする。そう考えると、この雑誌はやっぱりいまままでどおり有料という形のままにとどめておかねばならない気がする。

ほんとうは、金銭のやりとりでもってあなたの意

思を確かめるといふようなことの中には、どこもなく不誠実なものが残っているという感覚をぬぐいきれないのだが、ではほかにどういふ形をとるのがいいのかと考えても答えは出ない。単に雑誌を送ってほしいと思う人のメールアドレスを収集する？だがそれだけでは、やはりなにか足りないような気がする。そういう形をとることは簡単、というか、それをやるだけならものの数分でできてしまうようなことだが、わたしとあなたとのあいだにあるものが、それほど手軽な（フォームにメールアドレスを入力して登録ボタンを押すだけ！）関係でよいのかという、それもなんだか違うのである。

わたしは確かに選ばれる側なのだ。だが選ぶほうがどんな気持ちで選んでいるのかということ、結局わたしは求め、精査しているということになる。これは選ばれる側のルールに反するだろうか？どうもよくわからない。が、そういうことではないよな気がする。

結局、いまのところ、こうするよりほかに方法はなさそう。つまり、この雑誌制度は相変わらず月額定額で続けていこうと思う。ただし、この次は、その月額定額の中身を皆さんにいろいろと好きにいいじっていただけるようにするつもりだ。

たとえば、サブスクリプションの登録や解除、メールアドレスやクレジットカード情報の変更、月額

の金額なども自分の好きなタイミングで好きに変えられるようにする。こうした機能を実装するのは、本来ならかなり大変なのだが、これらをうまくいこと簡単に実装できそうな手段が見つかったのである。

とはいえ、やはりここにも落とし穴がある。他人の知識と技術に頼って実装するサービスは、なにかあったときに自分でどうにもできないということ、その人が提供をやめたらおしまいであること、そしておそらく数年でまた技術的に古くなり、もっと別なやり方が登場するに違いないということだ。

正直に云って、わたしはなんの技術もなく知識も持たない素人がこのような試みを実施することについては、かなり疑問に思っている。思っているのだが、不具合が起きたらそのときだという気もするし、サービスが終わったらそれもそのときで、たぶんまた数年でわたしの気持ちが変わってしまっただろうという予感もある。そのときに、わたしはまだサブスクリプションの金額が云々だの云々っているかどうか、これもわかりようがない。あんまりこんなこといつまでも云っていたら空海じいさんに怒られそうな気もするし、でもそれじゃあ、まるで滅私奉公状態でなにかもそこらじゅうに置いておく、というのも、それもまた違うような気がするのだ。

結局、すべては価値なる不可思議なものの問題に

帰着するかもしれない。なにに価値を感じ、なにを愛し、なにを誇りに思ったり支えにしたりするかは、みんなそれぞれ違っている。わたしの作品はわたしにとっては、価値というより自分の精神活動の結果とその残りかすみたいなものだ。こんな云い方もどうかと思うのだが、書き終わると、それは確かにひとつの結果であり、しばらくすると残りかすのようになって、そのときにわたしははじめて、ひとつの葛藤や、ひとつの次元が終わり、完結して閉じられたのを感じるのだ。

わたしにとって、ひとつの作品は確かにひとつの生命を燃やしたあかしである。それはわたしの中ではもう燃え尽きてしまったが、遠くの星のように、その光はある地点では、まだ消えないで光っているかもしれない。作品は星だ。わたしの生命も星だ。夏のあいだ、美しい南の星空を毎日眺めていたら、南の星がそうしたことをわたしに語った。

ずいぶん長々書いてきたけれども、そういうわけで、これまでのひとり雑誌「雪下」は今号でいったんおしまいとなる。来月もまたなんの変わりもなくこれを書いて作っている気がするが、受けとるかどうかは皆さんの価値基準に従って好きに判断していただきたらいいし、なにかもご自由にしていたらいい。これまでの会員情報などはすべて消去されるので、また一から登録のし直しになると思うが、

そのあたり、やっていただけの方はどうかご容赦願  
いたい。

リニューアルにもなつて、ブログを一時的に閉  
鎖する期間が出ることになる。たぶん明日にも閉鎖  
されることになると思う。再開は九月中を予定して  
いるが、再開した際には、なんらかの方法でお知ら  
せしたいと思っている。

ここまで、急に思いついて、一気に書き進めた。  
どうしてこんなことになったのかよくわからない。  
わたしのことなので、この気持ちが昂ぶっている時  
期を逃すともう永久にやらなさそうである。とつと  
と告知して、とつととやってしまおう。わたしの中  
に、またなんらかの変化が訪れたのだろうか。実際  
に、すべては変わってゆく。そして二度と元の状態  
に戻ることがない。それがなんらかの意味で成長で  
あるのなら大変いいのだが、そのような意図的な価  
値判断というのも、なにやらむなしような気がす  
る。

いろいろ書いたが、今号までお世話になった皆さ  
ま、ほんとうにどうもありがとうございました。来  
月からは、たぶん少し別の、しかしなにも変わらな  
いわたくしとその作品とが、またいつもの場所にあ  
るはずである。

### 後記に代えて

急ピッチで書いたもので、いろいろと漏れているこ  
とがある気がするが、以下はネット空間でなく現実  
の今後の予定について。

十一月二十日に、東京流通センターで開催される  
**文学フリマ東京35**というイベントに申しこんだ。

申しこみが遅かったので抽選になるかもしれないが、外  
れたら出られないという可能性もあるのだが、当選  
すれば参加できる。

これにあわせて、今年書いた作品をまとめた本を  
作る。現物とEPUBを作る予定だが、現物はお世



Jacek Malczewski : Sunflowers

夏が終わってしまった。数日前、おそらく今年最後の三十度超えと  
思われる日、夕暮れにあちこち歩きまわって、行く夏を惜しんだ。田  
んぼでは黄色く色づきかけている稲穂が並んで頭を垂れていたが、だ  
まって風に揺られる彼らがあんまり寂しそうに見えたので、どうした  
のかと訊ねてみたら、夏を送っているのですと、彼らは云った。

話になった人に配って終わりそうな気もするので、  
ブログにはEPUB版のほうを置いておくことにす  
る。ともかくも、本を一冊携えて、久しぶりに都へ  
のぼる予定である。  
なんだか急にやるが増えてしまった気がする  
が、仕方がない。またいろいろな活動して、その活動  
そのものが教えてくれるものを受けとることにする。

二〇二二年八月二十四日  
水澤絳雪  
<https://mjijms.com/>